

# 「ハタラクラスぐんま」プロジェクト によるインターンシッププログラムの取組 -Internship Program by Project" HATARA-KURASU GUNMA" -

群馬大学 大学教育・学生支援機構 教育基盤センター 教授 結城 恵  
YUKI Megumi (Higher Education Center, Gunma University)

キーワード：留学生交流拠点整備事業、インターンシップ、地域活性化

## はじめに

群馬県では少子高齢化による人口減少が進み、人手不足が深刻化している。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によると、群馬県の総人口は2040年には18.8%減、生産活動の中核をなす生産年齢人口（15歳以上65歳未満）は31.4%減となると予想されている。また、65歳以上の高齢者が総人口に占める割合（高齢化率）は24.8%（総務省2013）で、関東圏で最も高い。さらに、人口集積率（DID）も低く、高齢者の孤立や買い物難民、地域の伝統文化の維持継承の困難、産婦人科病院のない市町村の増加等、地域生活の存立基盤の維持が危ぶまれている。県内の製造業・物流業・農業・サービス業等の基幹産業においても人手不足の問題が深刻化している。

こうした状況にあって、群馬県内では留学生の存在に関心が高まっている。わが国には135,519人の留学生が在籍しているが、群馬県内の留学生はその約1%の1,409人であり全国的にみてもその数は比較的少ない（平成25年5月1日現在。独立行政法人日本学生支援機構調べ）。すなわち、群馬県において留学生は貴重な「地域人財」であり、留学生が卒業後も群馬県で働き暮らす環境づくりを進めることが喫緊の地域課題となっている。本報告は、この地域課題の解決に向けて、本学が県内4大学7地域機関等<sup>(1)</sup>と連携して実施した「ハタラクラスぐんま」プロジェクトのうち、特に留学生の県内就職につなぐためのインターンシップの取組を紹介する。

なお、「ハタラクラスぐんま」プロジェクトは、平成25年度文部科学省「留学生交流拠点整備事業」として実施した事業であり、その内容は、①コンソーシアム協議会の発足、②県内学生の就職と生活に関する実態調査、③前橋インターカレッジ学生交流拠点の設置、④アクションリサーチ「留学生と日本人学生によるプロジェクト型インターンシップ」、⑤学生企画ラジオ番組「ハタラクラスぐんま」の放送、⑥車座シン

<sup>(1)</sup> 本事業は、共愛学園前橋国際大学・群馬大学・上武大学・高崎経済大学の4つの大学と、群馬県国際戦略課・群馬県警察本部・群馬経済同友会・群馬県観光物産協会・前橋市・前橋市国際交流協会・前橋商工会議所の7つの機関等とコンソーシアム協議会を立ち上げて実施している。なお、平成26年度には前橋工科大学と群馬県労働政策課も参加することとなった。

ポジウム in 尾瀬の開催に及ぶ。本稿では、この事業で実施した実態調査を踏まえ、「留学生と日本人学生によるプロジェクト型インターンシップ」の必要性、実施内容・方法、その成果と課題をまとめる。

## 1. 留学の「地」が就職の「地」につながらない実態

日本で学ぶ留学生が就職も日本を希望するののかについては、私費留学生を対象とした全国的調査では、学部留学生の約6割が希望していた（日本学生支援機構 2012）。これまで留学生の地元志向の就職意向の実態については、栃木県で約4割の留学生が県内での就職を希望し、地元での人間関係や地元への愛着が地元志向の就職意向を生み出すという末廣（2013）の研究がある程度である。そこで、本プロジェクトに参加する県内4つの大学に在籍する全留学生837人を対象に、県内への就職意向を把握するアンケート調査を実施した。

有効回収票408票（有効回収率48.7%）を分析した結果、53.9%の留学生が日本での就職を希望しているが、群馬県内の就職意向は16.4%に留まることが判明した。調査対象となった留学生が所属する4つの大学は、東京から100km圏内に位置しているために、就職を考える上で、地方か・都心か・国外かという選択肢を想定する傾向にある。このアンケート調査の結果により、群馬をどのような意識で留学先として選んだのかが、留学生の地元への就職意向を大きく決定づけることが明らかになった。すなわち、生活・学習・就職等、目的意識を持って留学先に群馬県内の大学を選んだ【群馬「目的」派】は、就職の「地」も群馬県内に定める傾向がみられた。就職活動等で困った時の相談相手は母国人が中心で、学生時代の地元での地域交流活動への参加傾向は高いこともわかった。生活・学習・就職等、目的意識を特に持っていたわけではなく、物価が安い、知り合いがいないなど、群馬県の「地の利」に注目して留学先に群馬県内の大学を選んだ【群馬「地の利」派】は、就職の「地」を都心、あるいは国外に定める傾向がみられた。就職活動等で困った時の相談相手は母国人が中心で、東京への就職意向は高学年になるほど男子学生に現れた。本当は日本国内の別の大学に行きたかったが、群馬県内の大学をやむを得ず選んだ【群馬「想定外」派】は、就職の「地」を群馬県外、特に国外に定める傾向。就職をはじめ困った時の相談相手は母国人よりも日本人であり、特に、大学関係者に相談する傾向がみられた。

このように、群馬県においては、全般的に県内への就職意向は低い傾向にある。しかし、そのなかで、県内就職希望の留学生は確かに存在し、これらの学生は、群馬県を敢えて生活や就職の場として選択して群馬県内の大学に留学し、地域交流活動にも積極的に参加する傾向が確認された。これらの学生に共通していたのは、就職活動等の相談相手に、地元の（日本人）関係者がほとんどいないということであった。

その背景には、留学生を対象にした群馬県内に立地する企業の説明会が行われていないことや、特に人文社会学系の留学生の就職については、東京での就職活動を前提としないと情報も入手できない状況にあることが挙げられよう<sup>(2)</sup>。そこで、「ハタ

<sup>(2)</sup> 経済産業省と文部科学省による「アジア人財資金構想」の導入とそれ以降の継続事業、及び、産学連携による実践型人材育成事業が推進されている、本学の理工学府の留学生には、県内企業関係者との情報交換会やインターンシップの機会は提供されており、就職率も平成25年度は100%となっている。

「ラクラスぐんま」プロジェクトでは、人文社会学系の留学生の就職を地元で実現する仕組みを考えるためのアクションリサーチとして、留学生と日本人学生協働による「プロジェクト型インターンシップ」を企画・実施することとした。

## 2. 「ハタラクラスぐんま」プロジェクトによるインターンシップの企画・実施

### (1) プロジェクト型インターンシップの試み

上述したアンケート調査の結果、留学生が群馬県に就職を考える過程で、県内企業関係者や、日本人学生との情報交換や相談の機会がほとんどなかったことを踏まえ、本プロジェクトでは2つの仕組みを導入した。第一に、県内企業サイドから留学生の視点を活かせる「インターンシップ課題」を提供していただき、その課題の解決に貢献するプロジェクト型インターンシップを提供すること、第二に、留学生と日本人学生がインターンシップの場で相互に刺激し合い学び合う場を提供し、その後の就職活動においても相互に情報交換や相談相手になる関係を形成することである。

本年度は、留学生の視点を活かした商品開発を検討している企業として、県内の観光関係企業と連携することになった。この会社からは、群馬県有数の観光地「尾瀬」へのインバウンドを着地型観光で考えるという「インターンシップ課題」を提供いただいた。参加学生をプロジェクト参加4大学から募集したところ、留学生10名、日本人学生22名、合計32名の学生たちが集まった。国内の外国人観光客を誘客できる「尾瀬」の魅力をどのように引き出し発信するのか。県内観光関係者にも未着手となっていたこの課題の取組への糸口が、日本人学生と留学生たちの協働作業でどうたぐり寄せられるのか。平成25年5月に開始した事前指導検討会からはじまり、9月の現地フィールドワーク実習、その後の企画運営活動を含めて約1年間のプロジェクト型インターンシップが展開した。

インターンシップ実施にあたっては、冒頭の紹介した4大学7関係機関等関係者で構成されるコンソーシアム協議会でその目的・内容・実施方法の妥当性を検証し、より充実した実施体制づくりを検討した。参加希望学生に対しては、図1に示す事前研修を実施した。対象地域となる尾瀬の情報収集と課題解決のための仮説の構築と、今回のインターンシップで必要となる現地調査の手法の学習、「着地型観光」を構想するのに必要な現地関係者のみなさんへの事前訪問とネットワークの構築をすすめた。事前指導の中で学生たちが注目したのは、成田空港、羽田空港、新潟空港から尾瀬をめざす場合、新幹線、JR、バスの乗り継ぎが必要となることから、尾瀬への入り口が群馬県「沼田」となることである。沼田から尾瀬までのルートには国道120号と県道64号の2つの街道があり、この街道沿いで生活や事業を営む人々との交流を含めることで、これまでにない尾瀬への観光ルートを「地域総力戦」で作り上げられるのではないかと。



コンソーシアム協議会の様子

**尾瀬地域の環境政策**  
群馬県環境森林部自然環境課尾瀬保全推進室の須藤雅紀室長を講師に、尾瀬の環境及びその政策について学びました。

**観光による地域振興**  
前群馬県観光物産国際協会事務局長の牧野文成氏を講師に「着地型観光」の視点について、群馬県の考え方を学びました。

**学生・留学生フォトエスノグラフィー勉強会**  
尾瀬アクションリサーチに向けて、日本人学生・留学生も参加し、調査手法であるエスノグラフィーを学び、尾瀬及び周辺地域の写真から、各自の視点で疑問点などをまとめました。

**尾瀬事前フィールドワーク(履修生事前フィールドワーク)**  
「多文化共生推進士」養成ユニット履修生による事前フィールドワーク。アクションリサーチで訪問する場所への挨拶と事前調査を実施しました。

**尾瀬プロジェクト  
学生/留学生アクションリサーチ**  
平成25年9月7日(土)～9日(月)に実施。日本人学生・留学生10名とともに1～2日目は3グループで役割を分担して尾瀬を散策。3日目は沼田・片品と沼田・川場とコース別の2班に分かれて活動しました。

図1 インターンシップ事前研修の内容  
群馬大学・群馬県「多文化共生推進士」養成ユニット  
パンフレットより (P.26)



図2 学生たちが注目した着地型観光の2つのルート

9月には、上述した仮説を検証すべく、2泊3日のフィールドワークを実施した。地域に観光客を呼び込む着地型観光には、地域独自の魅力の発掘と多様なニーズに応

えることが必要である。生まれ育った文化や社会も異なる多様な学生たちが、フィールドワークで体感する驚きや発見、不自由さ、不便さをつぶさに記録する「カルテ」の作成が始まった。

その結果、学生たちが体感した新鮮な驚きや感動、そしてそれらを国内外に伝えたいという思いが高まった。徹底した環境保全の取組については、自由に水が使えないなど、観光客として最初は不自由さを感じるものの、その不自由さに代わって、植物と水の生態を直に学ぶことができる。これまでに見たことのない漆黒の闇に浮かぶ月や星の美しさも感動をもって体感できる。参加した中国人留学生からは、中国からひとりでも多くの観光客や視察団に尾瀬に来てもらい、環境保全の大切さを体感してもらえば、社会問題になっている大気汚染の対策も進むのではないか、という声も出た。

尾瀬の魅力は現地の「人」の魅力である、ということも学生たちの最も伝えたい重要項目となった。群馬県沼田市から尾瀬までの2つの街道沿いには、農業・工芸・食品・酒造等、豊かな地場産業がある。学生たちはこれらの街道沿いにある様々な地元のお店や生産現場を訪問し、地元の人々の土地とものづくりへの思いを見聞し、五感をつかって吸収することができた。その結果、学生の間には「〇〇さんに会いたいため、もう一度、尾瀬に行きたい」という思いが高まり、観光客にそうした思いを持たせるインバウンドの開発を進めたいという結論に至った。

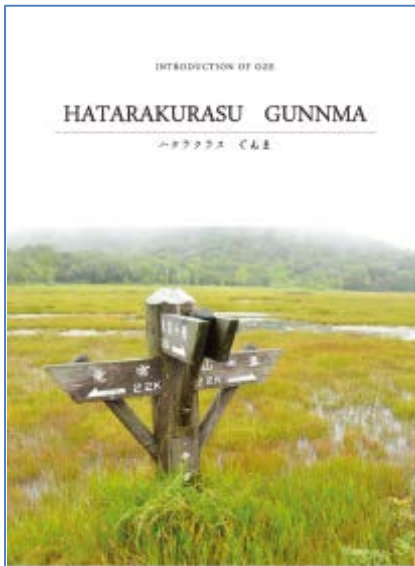
## (2) プロジェクト型インターンシップの広がり

学生たちがフィールドワークで検証し、抽出した「尾瀬」観光インバウンドの要件は、「尾瀬及び周辺地域の自然をその保全の必要性もあわせて体感してもらうこと」「尾瀬及び沼田から尾瀬に至る街道沿いで暮らし産業を営む人々とのふれあいを通して、もう一度〇〇さんに会いたいと思わせるような“後をひく”内容にすること」であった。平成25年10月以降は、上述した要件を、いかに国内外に発信し、実際に訪問してもらう仕組みをつくるかに取組が展開した。4つの参加大学の在学生在が参加しやすく、企業関係者も集まりやすい場所を拠点とするため、本学が前橋市と前橋商工会議所に協力を依頼し、前橋中心市街地にある「アーツ桑町」という貸しスペースを無償で借りることができた。毎週水曜日に活動会議「まちなかミーティング」を開き、尾瀬フィールドワークの成果を発信する企画を検討し実践を展開した。

プロジェクト型インターンシップで展開した活動は2つある。冊子『HATARAKURASU OZE-NUMATA』とラジオ番組「ハタラクラスぐんま」の制作である。冊子は、既成の冊子の作り方にこだわらず自由なスタイルで手軽に作成する、ZINEと呼ばれる制作物である。生まれ育った文化や社会が異なる学生たちが自由な発想で、自由な色使いで編集に取り組めるようにした。それ



「まちなかミーティング」の様子



ZINE の制作

それぞれの頁には、尾瀬－沼田間の豊かな自然を詩的に表現する静止画と、そこで暮らしを営む魅力ある人々の顔とふれ合いの記録が詰まっている。

一方のラジオ番組「ハタラクラスぐんま」の制作では、「尾瀬」観光インバウンド開発秘話の他に、留学生の採用を積極的に検討している企業関係者をゲストにお招きして学生たちが質問をするコーナー、留学生が日々の暮らしのなかで体験する異文化体験を、留学生と日本人学生と共に考える意見交換コーナー等が設けられ、多彩な構成になった。こうして、卒業後も群馬で働き暮らすことが留学生にとっても日本人学生にとっても具体的に考えられるような情報提供をすすめた。

ラジオ番組の制作にあたって、思わぬ効果も見られた。それは、番組の企画・運営に関わった学生たちが

ラジオのサブ・パーソナリティやゲストとして登場する場合、「わかりやすく伝える」ために様々な工夫をしはじめたことである。例えば、自分のアルバイトのエピソードで「物販」という言葉がでた時に、「漢字で見れば意味がわかるが、『ぶっぱん』という発音だけならわかりにくい」という指摘が学生の間から生まれた。このように学生の間で相手を配慮したコミュニケーションのあり方の模索が見られるようになってきたのも、このインターンシップのひとつの成果であろう。



ラジオ番組「ハタラクラスぐんま」収録の様子

## おわりに

2014年6月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてユネスコ世界遺産に登録された地域資源をもつ群馬県は、2020年の東京オリンピックの開催も控え、東京から気軽に行ける観光地として今後も観光インバウンドのルート開発等が活発になることが予想される。その開発において本インターンシップにも示されたように、留学生は、さまざまな発想とアイデアを提供する貴重な「地域人財」となる。さらに日本人学生と協働でインターンシップ体験を積み重ねることで、日本人学生と留学生とが相互に理解し合い・支え合い・刺激し合う関係性を築くことができる。その経験は、これからのグローバル社会を生き抜く人材の養成にとっても有用なものとなると思う。

## 引用文献

日本学生支援機構（2012）「平成23年度私費外国人留学生生活実態調査」。  
末廣啓子（2013）「地方圏における外国人留学生の就職に関する実態と課題--栃木県における外国人留学生のキャリアデザインと企業のグローバル化をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』第63号, pp. 279-95。